

森 一久 略歴

- 大正 15 年 1 月 広島県広島市生まれ（恒三・カヨの四男）
- 昭和 11 年 4 月 広島県師範学校附属小学校（現広島大学附属東雲小学校）卒
- 昭和 17 年 3 月 広島県立広島第一中学校 4 年修了
- 昭和 19 年 9 月 広島高等学校理科甲類卒
- 9 月 京都帝国大学理学部物理学科入学
- 昭和 20 年 8 月 広島で原爆体験
- 昭和 23 年 3 月 京都大学理学部物理学科卒（素粒子論専攻）
- 4 月 中央公論社入社（科学雑誌『自然』および『婦人公論』編集部勤務）
- 昭和 31 年 4 月 電源開発(電発)入社（以降、昭和 40 年 3 月まで原産と兼務）
- 5 月 （社）日本原子力産業会議(原産)創立とともに派遣(以降、昭和 40 年まで電発と兼務)
- 昭和 38 年 4 月 東京十二チャンネル（現テレビ東京）編成部長（以降、昭和 40 年まで、原産と兼務）
- 昭和 44 年 6 月 （社）日本原子力産業会議事務局長に就任
- 昭和 46 年 仏「グラン・ド・シュバリエ・ド・ロード・デ・メリット勲章」受賞
- 平成 8 年 6 月 （社）日本原子力産業会議常任副会長に就任
- 平成 9 年 韓国「大韓民国国民勲章石榴章」受賞
- 平成 16 年 （社）日本原子力産業会議常任副会長退任
- 平成 16 年 UCN会創設（代表幹事）

現在は、UCN会代表幹事のほか、(財)温水養魚開発協会常務理事、(社)学士会、(財)第五福竜丸平和協会、(財)湯川記念財団の評議員、日本佛教徒懇談会幹事などを務める。
(2007年まで)

- 著書 「原子力にルネッサンスを」（平成 8 年エネルギー政策を考える会）
「原産半世紀のカレンダー」（平成 14 年日本原子力産業会議）
「財団法人電力経済研究所小史」（平成 19 年 UCN 会）
- 訳書 「原子力発電の経済的影響」（昭和 29 年東洋経済新報社）湯川秀樹 序(4頁)
「原子力発電—コルダールホール物語」（昭和 32 年岩波新書）
- 論文 「原爆体験と日本の原子力開発」（独誌「アトム・ビルトシャコフト」、原子力学会誌）
「原子力の意味を考える」（平成 15 年 (財)統計研究会）」
「ビキニ水爆実験と日本の科学者」(平成 16 年 (財)第五福竜丸平和協会刊)

森 一スオーラルヒストリー

■目次■

略歴……………	1
はじめに(伊藤隆)……………	4

《第1回》……………7

生い立ち(大正十五年〜)
 広島第一中学校(昭和十三年〜十七年)
 広島高等学校(昭和十七年〜十九年)
 エピソード(原爆投下を知らせた男)
 京都大学入学(昭和十九年)
 広島での被爆(昭和二十年)
 中央公論社に入社(昭和二十三年)
 原子力談話会(昭和二十七年頃)
 中央公論社の人々
 電力会社の「国管アレルギー」
 小坂、正力、中曽根
 日本の原子力発電
 結婚と津野田氏の周辺
 仏教徒懇話会
 ビキニ(第五福竜丸)事件
 原爆と日本人

《第2回》……………39

原子力談話会と電力経済研究所
 七人の侍による予算獲得
 原子力基本法と原子力委員会

原子力産業会議の発足(昭和三十一年)
 原産の活動(1法制委員会)
 原産の活動(2経済委員会)
 原産の活動(3総合エネルギー委員会、原子動力委員会)
 原産の組織と人事
 二年目の原産(昭和三十二年)
 東京十二チャンネルと原産の兼務(1)
 東京十二チャンネルと原産の兼務(2)
 三年目の原産(昭和三十三年)
 原子力船懇談会と「むつ」

《第3回》……………69

放射能・放射線・放射化
 イギリスの重水炉とアメリカの軽水炉
 原産国産問題と「原子力一族」
 東海村の第一号原子炉
 原子炉国産と原子力界の「空気」(1)
 原子炉国産と原子力界の「空気」(2)
 原子炉国産と原子力界の「空気」(3)
 日本原子力発電株式会社(昭和三十二年設立)
 原子炉事故の試算、委託調査(昭和三十五年)
 「原子力損害の賠償に関する法律」の成立
 核査察とIAEAの発足
 国産一号炉の臨界(昭和三十七年)
 核燃料再処理について(1)
 核燃料再処理について(2)
 原子力の精神作興のために
 温水養魚開発協会

《第4回》.....

101

核燃料としてのウラン
原子燃料公社
再処理工場の発注
再処理工場運転の差し止め
日本原子力普及センターと東海クラブ
立地問題、原発反対運動
電子計算機の導入
立地問題特別委員会
使用済み核燃料輸送
森氏、原産事務局長に就任
核拡散防止条約
原産の会長人事
温水養魚開発協会
放射線の効用
核物質管理センター
ソ連との関係
有沢広巳原産会長のこと

《第5回》.....

133

中越沖地震と柏崎刈羽原発（平成十九年）
電源三法の成立（昭和四十九年）
原産の体制改革、有沢広巳氏会長就任
美浜・高浜でのトラブル（昭和四十九、五十年）
原子力委員会と原子力安全委員会
東海再処理工場運開とアメリカ（昭和五十二年）
新型転換原型炉「ふげん」（昭和五十三年）
スリーマイル・アイランド原発事故（昭和五十四年）

《第6回》.....

167

民間再処理と日本原燃サービス（昭和五十五年）
中国との交流
敦賀原発での異常放射能検出（昭和五十六年）
高速増殖炉「もんじゅ」（昭和五十七年）
原子力船と原子力潜水艦158
チェルノブイリ原発事故（昭和六十一年）
チェルノブイリの教訓・
研究炉解体の経験と教訓（昭和六十一年）
ウラン濃縮の問題
六ヶ所村に低レベル放射性廃棄物貯蔵センター着工（平成二年）
美浜原発の事故（平成三年）、BWRとPWR
朝鮮半島エネルギー開発機構・KEDO（平成七年）
「もんじゅ」のナトリウム漏洩（平成七年）
プルサーマル全体計画（平成九年）
GNF設立（平成十二年）、軍事技術と原子力発電所
平成十二年以降の原子力事情
関電・美浜原発事故（平成十六年）
原子力産業会議の改組（平成十八年）
UNCN会
終わりに

森 一久 略歴

- 大正 15 年 1 月 広島県広島市生まれ（恒三・カヨの四男）
- 昭和 11 年 4 月 広島県師範学校附属小学校（現広島大学附属東雲小学校）卒
- 昭和 17 年 3 月 広島県立広島第一中学校 4 年修了
- 昭和 19 年 9 月 広島高等学校理科甲類卒
- 9 月 京都帝国大学理学部物理学科入学
- 昭和 20 年 8 月 広島で原爆体験
- 昭和 23 年 3 月 京都大学理学部物理学科卒（素粒子論専攻）
- 4 月 中央公論社入社（科学雑誌『自然』および『婦人公論』編集部勤務）
- 昭和 31 年 4 月 電源開発(電発)入社（以降、昭和 40 年 3 月まで原産と兼務）
- 5 月 （社）日本原子力産業会議(原産)創立とともに派遣(以降、昭和 40 年まで電発と兼務)
- 昭和 38 年 4 月 東京十二チャンネル（現テレビ東京）編成部長（以降、昭和 40 年まで、原産と兼務）
- 昭和 44 年 6 月 （社）日本原子力産業会議事務局長に就任
- 昭和 46 年 仏「グラン・ド・シュバリエ・ド・ロード・デ・メリット勲章」受賞
- 平成 8 年 6 月 （社）日本原子力産業会議常任副会長に就任
- 平成 9 年 韓国「大韓民国国民勲章石榴章」受賞
- 平成 16 年 （社）日本原子力産業会議常任副会長退任
- 平成 16 年 UCN会創設（代表幹事）

現在は、UCN会代表幹事のほか、(財)温水養魚開発協会常務理事、(社)学会、(財)第五福竜丸平和協会、(財)湯川記念財団の評議員、日本佛教徒懇談会幹事などを務める。

- 著書 「原子力にルネッサンスを」（平成 8 年エネルギー政策を考える会）
「原産半世紀のカレンダー」（平成 14 年日本原子力産業会議）
「財団法人電力経済研究所小史」（平成 19 年 UCN 会）
- 訳書 「原子力発電の経済的影響」（昭和 29 年東洋経済新報社）
「原子力発電—コルダールホール物語」（昭和 32 年岩波新書）
- 論文 「原爆体験と日本の原子力開発」（独誌「アトム・ビルトシャコフト」、原子力学会誌）
「原子力の意味を考える」（平成 15 年 (財)統計研究会）」
「ビキニ水爆実験と日本の科学者」(平成 16 年 (財)第五福竜丸平和協会刊)

陸軍大将

関係する文獻は極めて少ない。唯一の本人執筆の史料は現在防衛研究所に保存されており、現在は公開となっている。この史料に関しては『軍事史学』二十四(二)通巻九十四号、昭和六十三年で高橋久志氏が「多田駿手記」として史料紹介している。この史料は昭和二十一年(西)一月五日に作成され、A級戦犯容疑者の指名を受けた際に法廷での弁護を予期して記述したもの、自宅軟禁の状態にあって結局のところは提出するには及ばなかったという文書である。

伝記は刊行されていないが、額田坦の『陸軍人事局長の回想』(芙蓉書房、昭和五十二年)、武藤章著／上法快男編『軍務局長 武藤章回想録』(芙蓉書房、昭和五十六年)、森松俊夫『軍人たちの昭和史』(図書出版社、平成元年)にはまとまった記述がある。そのほかには日本憲友会連合会編纂委員会『日本憲兵正史』(全国憲友会連合会本部、昭和五十一年)、田中隆吉の『敗因をつくゝ軍閥専横の実相』(山水社、昭和二十一年)には浅原事件の記述に関連して名前が散見される。研究としては『日本歴史』四一(昭和五十七年)にゲルハルト・クレープス氏が「参謀本部の和平工作一九三七—一九三八トラウトマン工作はどのようにに生まれ、挫折して行ったか」がある。(五十嵐 憲)

立花小一郎(たちばな・こういちろう)

文久元—昭和四年(一八六一—一九一五) 陸軍大将

旧蔵の文書は、憲政資料室に「立花小一郎関係文書」として所蔵されており、仮目録が作成されている。その数一二五点で、マイクロフィルム化がなされており、閲覧はマイクロフィルムで行うことになる。内容は、書簡・日記・書類で、一部に弟の立花銑三郎(慶応三—明治三十四年(一八六二—一九一九)、帝国大学文学部哲学科卒、学習院教授、教育学者)、嗣子の立花馨の関係文書も含まれている。

書簡は陸軍関係者からのものが多い。点数では、曾我祐準(二十七通)、陸軍中将、立花と同じ福岡県柳川の出身で、娘が小一郎の弟、銑三郎に嫁いでいた、明石元二郎(二十三通、陸軍大将)からのものが特に多く、その他比較的多いものに福田雅太郎・松川敏胤・長岡外史・仁田原重行・白川義則・上原勇作(以上陸軍軍人)、伊沢修二(義兄、文部官僚)などからのものがある。

「回顧日録」と題された日記は、明治四十二年一月から大正十二年(一九二三)十二月までのものがある。書類には、北清事変時の連合軍総司令官日本幕僚部の日誌や、袁世凱の軍事顧問時代に参謀総長宛に提出していた報告書の草稿である「在清報告稿」などがある。

なお、立花が発した書簡は「寺内正毅関係文書」(憲政資料室所蔵)、上原勇作関係文書研究会編『上原勇作関係文書』(東京大学出版会、昭和五十一年)などに残されている。

まとまった伝記はないが、黒電会『東亜先覚志士伝』、東亜同文会編『対支回顧録』(いずれも原書房から復刻されている)の列伝で取り上げられているほか、立花馨による『立花小一郎小話』(立花小一郎関係文書)所収、渡部求『立花大将を悼む』(人格に触れて三洋社、昭和五年)などがある。その詳しい軍歴については、同関係文書中の兵籍簿によって知ることができる。福岡市長時代(大正十二年八月—十四年八月)の事績については、歴代知事編纂会編刊『日本の歴代市長』三(昭和六十年)が手がかりとなる。

袁世凱の軍事顧問、ポーツマス会議全権随員、関東軍司令官、浦塩派遣軍司令官、福岡市長、貴族院男爵議員など、重要かつユニークな経歴を持つ軍人でありながら、立花自身に関する研究、あるいはその関係史料を用いた研究もほとんど見当たらない。『上原勇作関係文書』中の書簡が使用される程度であり、今後の研究が待たれる。(土田 宏成)

橘孝三郎(たちばな・こうさぶろう)

明治二十六—昭和四十九年(一八九三—一九二四) 愛郷塾長